阿重霞、天地の部屋を掃除するのこと

昼間、魎呼が居間に行くと、阿重霞が机に突っ伏していた。
「どうしたんだ、あいつ」
魎呼は近くに居た美星に尋ねた。
「はぁ、それがどうも、阿重霞さん、天地さんの部屋で何かをみつけたようで…」
美星が言いかけると、阿重霞が突然、
「あああ――――――」
声を上げて泣き出した。

その日の午前中、阿重霞は天地の部屋を掃除していた。掃除機をかけ、脱ぎ散らかした服を箪笥に掛け、本棚から飛び出している本を整理する。極力、天地の部屋には入らない様にしている阿重霞だが、部屋の乱れは心の乱れ。天地様には綺麗なお部屋で快適に暮らして頂かなくてはと、時々こうして掃除をしているのだ。無論、天地も許可をしている。
そうして、最後に机の上の整理をしようと思った時、ソレを見つけた。ソレは、天地宛ての手紙だった。ただの手紙ならば阿重霞には関係の無い事である。だが、その手紙は…

「女性の字だったのよ！」
「女？」
魎呼が面倒臭そうに訊き返す。美星は傍らで阿重霞の言葉の続きを待っていた。
「そうよ、女性！女性の文字で天地様に宛てたお手紙だったのよ」
「けっ。何だよ」
「魎呼さん、気になさいませんの？」
今度は美星が魎呼に尋ねる。
「気になんかならねぇよ。たかだか手紙の一通や二通だろ？」
「一通よ！」
間髪いれずに阿重霞が訂正する。
「たいして変わらないじゃないか。手紙なんて、所詮、紙だろ、紙。あたしゃあてっきり、天地の部屋からエロビデオでも出て来たのかと思ったぜ」
「まあ！」
美星が驚いて顔を赤くする。平然と茶を啜る魎呼に、阿重霞が金切り声をあげた。
「どうしてあんたは、そう下世話な事ばかり言うのよ！天地様に女性から手紙が来たのよ」
「だから？」

「だからって…心配じゃありませんの？どんな方なのか、何処で天地様と知り合ったのか、何故お手紙を出したのか」
「別に、気にならねぇよ」
阿重霞が唖然とするほど、魎呼はあっさりと言い切った。
「大体、手紙一通でギャーギャー騒ぐ方が可笑しいんだよ」
「なっ」
「天地はね、他所に女を作る様な男じゃないし、仮に作ったとしても、いつでもあたしのところに帰ってくるんだよ」
「なんで、あんたのところなのよ」
「あたしは天地のもの、天地はあたしのものだからだろう」
二人は完全に睨み合い、今にも取っ組み合いになりそうだったが、美星がのんびりとした声で、それでと口を挟んだ。
「それで、天地さんにはご確認されたんですか？」
「へ？」
「どなたからのお手紙かと訊いてみたんですか？」
「いいえ…まだ」
阿重霞は急に大人しくなると、かぶりを振って、俯いた。魎呼はじれったくなり、
「よぉし！じゃあ、その手紙を持って、天地に訊きに行こうぜ」
立ち上がった。慌てて阿重霞も立ち上がり、魎呼を止めた。
「そんなことできるわけないでしょう。そんなこと、駄目です、認めません」
「何でだよ？」
「て、て、天地様への恋文かもしれないお手紙を天地様に尋ねるなんて…」
先程まで威勢の良かった阿重霞は、次第にもごもごと口の中で言葉を呟いた。
「天地へのラブレターかどうか分からないじゃないか」
呆れた魎呼が言うと、美星が目を輝かせた。
「でも、もしそうならロマンチックですよね」
「ばーか。告白っつーのは、正々堂々と直接するから良いんだよ」
「はぁ、そういうものですか？」
「そういうもんだ」
それでも、阿重霞は決断出来ず、俯いていた。
「天地様への…本当に、恋文だったら私…」
魎呼は鼻に皺を寄せ、不満そうに言った。
「だったら、何？何が問題なんだよ」
「だって…！」
「だってもへったくれもあるかよ。見つけちまったのはお前だろう。だったら、この際、もう腹括れよ。手紙の中身を知りたいのか、知りたくないのか」

「そ、それは…知りたいですけれど…でも…」
「あーもーハッキリしねぇな」
魎呼は苛々して床を蹴った。
「魎呼さん、中身を知るって、どうするんです？天地さんに訊くんですか？」
美星が魎呼の顔を覗き込んで尋ねると、魎呼はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「手紙を開けるんだよ」
「ええ、開けるんですか？」
魎呼の言葉に阿重霞も思わず顔を上げた。
「天地の奴に直接訊きに行くよりも、断然、その方がいいじゃねぇか。実際、天地はあたし達に手紙の事を黙ってたんだからさ。天地に訊いたところで教えてくれないかもしれないもんな」
「開けて、もし、天地さんにバレたら…」
「大丈夫、大丈夫。開けたって、もう一度、封をしておけばバレねぇよ」
魎呼の軽い口調に、阿重霞は些か不安を覚えた。

とはいえ、天地の手紙の中身が知りたい。三人は、天地の部屋に移動すると、噂のソレを覗き込んだ。ピンク色は花の模様が描かれたその手紙は、美しい字で「柾木天地様」と書いてあった。
「よし、開けるぞ」
阿重霞は手が震え無理だと言い、美星は万が一破ってしまったら困るというので止めたので、結局魎呼が開封することになった。魎呼は封がされている部分にカッターを差し込み、ゆっくりと紙を剥がしていった。しかし、なかなか剥がれない。
「ちょっと、早く開けなさいよ」
「天地の手紙、開けるの怖いって言ってた奴が急かすなよ」
「魎呼さん、あの、私、変わりましょうか？」
「ほんと、あんたって不器用ね」
「あ、魎呼さん、そのままだと、封筒を破ってしまいますよ」
「あーもーお前らはグチャグチャうるせぇなっ！」
魎呼がぐいとカッター引っぱった時、ビリッと音がした。
「「あっ」」
三人は呆然と手紙を見つめた。封と同時に、封筒も一緒に破れてしまった。
「お前らが煩いからこうなったんだぞ」
「どうするのよ」
「なんとかくっつきませんかね？」
「ふん、ここまできたら仕方ない」
魎呼はビリビリと、乱暴に封筒を破いた。

「ちょっと！何してんのよ！」
「仕様が無いだろう？このままにしても何だし、ここまできたら、堂々と破って、お手紙拝見といこうじゃないの」
阿重霞は複雑な想いだったが、天地への手紙の中身は知りたく、今は魎呼に従うしかなかった。
「コホン。んじゃ、あたしが読むぜ」
「手紙の中身が気にならないとか言って、本当は一番気になってるんじゃないの？」
「良いだろう、誰が読んでも。んじゃあ、読むぞ」
天地の部屋の床に、三人は座った。魎呼を真ん中に、阿重霞。美星がそれぞれ傍らに座って、魎呼の読む天地宛ての手紙に固唾を飲んだ。
「拝啓、柾木君お元気ですか。私は、元気にしています…随分、普通の挨拶だねぇ」
「挨拶なんてどうでも良いですわ、次」
「えーと…私が此処に越してから、早くも三ヶ月が経ちました」
「三ヶ月前にはお知り合いだったってことですよね」
「此処には、素直で可愛い子ども達が沢山います。まるで、柾木君の様で、懐かしいです」
「懐かしいって何よ？」
「子どもって？」
「…まさか、天地の奴、あたし達の知らない間に、隠し子が居るんじゃねぇだろうな」
「ええ！天地さんに子ども？」
「そ、そんな訳ないでしょう、天地様に限ってそんな事。ありえませんわ」
「天地の奴、あたしに手を出さないと思ったら、他所に女、囲ってやがったな…」
魎呼は手紙を置き、頭を抱えた。美星はオロオロと困っている。阿重霞は手紙を手に取った。
「待ってよ、達ってあるじゃないの」
「天地の奴、何人子どもが居るんだよ」
「そんな…天地さんが…」
「…兎に角、最後まで読んでみましょう」
魎呼に続いて阿重霞が手紙を読み上げた。
「あの頃の柾木君は本当に素直で明るく元気でしたね。そして、優しい心を持っていました。今度の子達も、皆、あなたの様に明るく優しく育って欲しいと思います」
「今度の子達？」
「あら、もしかしてこの人が出産で里帰りするからって、お手紙下さったのかしら？」
「出産だと！」
思わず、魎呼はオーラ・ブレードを手から出し、美星に掴みかかった。
「きゃあ、止めて下さい、魎呼さん！お、お手紙にあることですから！」

「だけど、今、出産って言ったじゃねぇかよ！」
「止めなさいよ、魎呼さん。美星さんが悪い訳じゃないわ」
「じゃあ、誰が悪いんだよ、誰が」
　それは他ならぬ天地だと阿重霞は思った。自分達が…いや、自分が居ながらにして、他所に女を作り、さらに隠し子までいるなんて！と、阿重霞は怒りを覚えた。阿重霞はそのまま読み進めた。
「また新しい地で、新しい環境で担任をするのは大変ですが、頑張って行こうと思っています。柾木君も、自分の置かれた環境で、沢山の事を学び、頑張って下さい。私はいつでも応援しています。また、こちらに遊びに来る際には連絡して下さい。ゆっくり会いましょう。それでは…」
「担任って何だよ」
　最早、頭が混乱している魎呼が涙目で阿重霞を睨んだ。
「知らないですわよ…」
「こちらって、どちらなんでしょう?天地さんとしょっちゅう会っている訳じゃないんですかね？」
美星も首を傾げた。阿重霞は綺麗な文字を目に映しながら、考えた。
「担任って…天地様、恋愛相談所にでも申し込んだのかしら」
ふと思った事が口をついてでた。魎呼が阿重霞に近づき、阿重霞から手紙を奪って一気に読み返した。
「恋愛相談所って、最近、恋人の居ない人へ、出会いの場を作る相談所のことですよね？雑誌とかで私、見た事ありますよ」
「きっと、そうだわ。私達に隠れて、天地様は其処に行ってらしたのよ」
「でも、子どもは？」
「子どもは…そう、天地様とその人が恋人関係になって…」
いや、これでは良く出来過ぎたドラマみたいだと阿重霞は思った。違う気もすると…
「恋人になっちゃったから、相手の方が担当変わられたんでしょうかね？」
美星はまだ信じているようだ。だが、何かが違うと阿重霞は首をひねった。その傍らで
「天地ぃぃぃぃぃ…あたしが居るのに、なんでそんな所に行ったんだよぉぉぉ」
あんなに大きく構えていた人物と同じ人物とは思えない程、魎呼が手紙を握りしめ号泣していた。魎呼は手紙をもう一度見ると、まるで世にも嫌なものに触れるように、
「こんなもん、こうやって無くなっちまえば良いんだああ」
と、一気にビリビリと破り捨てた。
「ちょっと！魎呼さん！」
「あー破ったら駄目ですよ、魎呼さん」
　美星と阿重霞は止めに入ったが、遅かった。魎呼の膝の上にくしゃくしゃに破られた紙が散らばる。そして、魎呼はその膝に突っ伏して声を上げて泣き始めた。もう誰も手

に付けられない状態だ。どうしようもない魎呼と、散らばった紙。阿重霞はどうしたものかと困惑した。そこに、廊下からの足音が聞こえて来た。階段を上り、足音は近付く。まさか…と思った時、ただいまと、畑から帰って来た天地が顔を出した。色を失う阿重霞。魎呼を宥める美星。そして、美星を振り払って天地に駆けよる魎呼。

「天地ッ！何だよ、あの手紙は！」

「どうしたんだよ、魎呼。泣いてるのか？手紙って何だ？」

帰宅したばかりの天地には何が何だか訳が分からなかった。

「天地さんのお机にあったお手紙です」

美星が説明すると、ああ、と天地は思い出した。

「あれですか、あれは…」

「天地様の大事な方なのでしょう？」

自分の声が震えている事に、阿重霞は気が付いていたが、訊かずにはいられない。

「ええ。小学校の時の担任の先生です」

「…え」

「小学校一年生の時に担任して貰っていて、丁度今年の春に、別の県への赴任が決まったんです。ご主人の仕事の関係だったのかなぁ」

呑気に話す天地に、魎呼、阿重霞、美星は固まった。

「…じゃ、じゃあ子ども達って…」

「子ども？先生にもお子さんいらっしゃったけど、俺より大きいんじゃないかな。先生、子ども好きだからきっとまた、新しい学校でも生徒を可愛がると思うよ。俺、結構可愛がられたんですよ。柾木君は素直な子だって」

ニコニコと天地が話す。

「では、恋愛相談所では…」

おずおずと尋ねる美星に、天地は首を傾げた。

「恋愛相談所？なんです、それ」

一同は暗くなった。魎呼は足元に散らばる紙くずを見つめながら、聞こえないほど小さな声で、

「何で、天地に手紙来たの…」

天地に尋ねた。天地は、魎呼の泣き腫らした瞼を不思議そうに見つめながら、

「先生が転勤するって年賀状に書いてあったから、俺が手紙出してみたんだよ。それにしても、魎呼、その目、どうしたんだ？」

一同は自分の足元、手元をじっと眺めた。天地は三人の顔を見渡し、

「でも、何で皆、先生から手紙が来た事知ってるの？俺、まだ中身読んでないんだけど…」

と、言った。阿重霞は恐々と顔を上げると、

「実は…」

真相を語り始めた。

その後、三人は天地にこっぴどく叱られた。特に魎呼は尚更だった。開封の案を出したのも、天地がまだ読んでいない手紙を破ってしまったのも魎呼なのだから、当然と言えば当然であるが、阿重霞は今回は少しだけ、魎呼に同情した。もし、魎呼がああしていなければ、自分が開封していたかもしれないし、天地から内容を聞く前に、勘違いして破り捨てていたかもしれない。現に阿重霞は、ソレを発見した時、迷ったのだ。机に置かれた、天地の名前が書いてあるピンクの封筒を発見した時、阿重霞はこの手紙を持ち去ってしまったらどうなるかだろうかと邪な考えが過ったのだ。

天地は暫く怒っているだろう。もしかしたら口も利いてくれないかもしれない。けれど、阿重霞は、手紙を持ち去らず、天地の口から真実を聞けて良かったと思った。阿重霞達が想像した結末では無かったことは勿論、何よりも、天地に自分達以外の、自分以外の女性が居なかった事に安心したのである。